

やせほそる日本文化

大正十五年十月、中学時代の恩師が京城帝大法文学部教授だった安倍能成に紹介したことが縁で、渡植は京城帝大法文学部の助手に採用されることになった。

話があったとき彼自身、自分の学者としての実力が買い被^{かぶ}られている気がして、少し気が引けた。二十七歳になっていたが、業績といえば社会問題研究所で書いた先の駄作だけである。身に余る話だった。迷ったが、そこは江戸っ子である。せつかく世話をしてくれた人たちの期待に応えようと京城行きを決意した。左右田に報告に行くと、かれは経緯をすでに承知しており、よい機会だからと弟子を激励した。

結婚して、原宿に居を構えていた本多に別れをつけにいった。

結婚間もないのに、ぜひ泊まっていけという。友情に甘え、新妻を別室にひとりにし、二人は床をならべた。

ゼミで知りあって以来、五年余りたっていた。自分が本多を敬愛するのは、かれの学識の深さだけではなく、何よりも本多が人一倍豊かな情操の持ち主であるからだ。渡植は親友のことをふりかえった。たしかに、本多をみていると、箸の上げ下げひとつにしても品格があり、文句のつけようがない人物であった。

一方、本多は渡植のどこに魅かれたのか。一つは、渡植が育つなかで自然と身につけてきた東京の下町文化と無縁ではなかったであろう。

渡植の晩年、松山商科大学で教えを受けた私は、権現の自宅で新宿の中村屋から取りよせた食材で仕込んだカレーをよくご馳走になった。人物評はいつも辛辣だが、門下生のことはその家族のことまで、いつも気にかけていた。やがて渡植はこの田舎町で知り合った人たちに、歯切れのいい話しっぷりから「古今亭志ん生」のあだ名をつけられることになる。



どこか漱石の「坊っちゃん」に似た江戸っ子の打算のない生き方が、きっと本多にはない魅力だったように思う。

友愛を重んじた二人だが、女性観にたいしては共に時代的制約に縛られている。それは今日では滑稽とさえいえるものである。

渡植は戦前はよく、一番愚かな男と最も出来のいい女が人間的にはちょうど同じくらいだといって憚^{はばか}らなかつたから、気ぐらいの高い妻と何かにつけて衝突し、夫婦仲は決してよくなかつた。

二人の女性観を知る一助として、本多が昭和十二年に雑誌『饗宴』に発表した「悪の問題」という論文がある。本多は、女性の悪徳も社会悪の一表現であると断りながらも、オットー・ヴァイニングルの女性蔑視論を次のように引用している。

「女性には概念的行為も判断的行為も缺けてゐる。女性は自ら知らうといふ欲望をもたず女性自身の手になる心理學をもたぬ如く、統覺力を缺いて各瞬間の氣紛れに随つて行動する。女性には論理學も存しない。いはば女性は無意識のうち生存する。この意識を醒めるものは男性に外ならない。女性は客體であり男性は主體である。(中略)そしてこの女性の物質性をヴァイニングルは女性が性慾そのものであり、その持續である點にみる。一方に懐妊力の基と考へられるものが同時に性格悪の源とも看做される。誤謬・嘘言・氣紛れ・眞の愛の缺除・殘酷・破廉恥・虚榮等々がそれである。」

二人だけがとくにそうだったということではなく、男同士の人間的な触れあいの方が、男女の結びつきよりも価値あることと考えられていた。そのような時代のなかで、二人は終生変わらない友情をわかちあった。

莫逆の友と別れの一夜をすごした翌日、渡植は谷中の家を売り、京城行の資金をつくった。

夫婦の間には女子が二人生まれており、家族四人と女の使用人の五人全員が京城まで、汽車も船も一等車だった。

しかし、助教授になる見込みはないのにあっさり東京の生活を捨て、妻子を抱えての京城行はいかにも世間知らずだったと渡植は回想に記している。

京城に居を構えてからも、渡植は東京と同じ生活を守ろうとした。とくに、食事にはうるさかった。

新婚当初、竈^{かまど}の火も満足におこせない善をかばって、岳父から「下女はしたの業の習熟せざるをもって、善をせめるなかれ」という詫び状が届いていた。身の回り一切、使用人任せで育った彼女は家事は本当に何もできなかったのである。

そのような家族が朝鮮で、東京と同じような食生活をしようとしたから、実際に家事を切り盛りする使用人は大変だったらしい。

善は使用人が逃げ出さないように自分のもち物を次々に与え、食材をそろえるために着物を質に入れた。

こうした身内の苦労も知らず、渡植は大学の研究仲間を家によく招いて会食を愉しんだ。長女の紗江子には、このころこんな思い出がある。

その日、父の大事な客が来るというので、数日前から仕入れていた地鶏を丸ごと大鍋で煮込んでいた。夕刻、やって来たのは安倍能成である。安倍はすでに何回か顔を見せたことがあり、紗江子にとってはやさしいおじさんだった。そっと客間へ行くと、いつもはつれがいるのに、客は安倍一人だった。食卓には飴色に煮込まれた地鶏がおかれている。

紗江子が父の背中ごしに、その地鶏をじっとながめっていると、安倍が紗江子の視線に気づいて話をとめた。「嬢や、いっしょに食べよう」安倍が誘い、「あとで、骨だけちょうだい」とすかさず紗江子が応えた。

安倍は腹を抱えて笑いだし、両親は顔を真っ赤にしてうつむいていた。

京城帝大の助手を三年勤めた渡植は三十歳の春の昭和四年四月、京城高等商業学校の助教授に迎えられた。

この思い切った転進の実情は、帝大の助教授昇進問題で争いをさけた渡植が潔く身を引いたことにある。学問の中枢にいることは魅力であったが、地位への確執で未練汲々とするのは渡植の性分ではなかった。

高商での担当は経済原論だった。これまで哲学の研究をしてきた渡植は、講義の方はドイツ語のハンドブックでなんとかこなし、あとは研究室にこもって、日本語で書かれた経済学の書物をかたっぱしから読んでいった。マルクス経済学関係の文献もあらかた渉猟したので、今度は『資本論』を読むつもりでいたところ、経済原論の担当は一年で解かれて教授に昇任し、修身、哲学、ドイツ語の講座をもつことになった。

帝大とは違い、高商の教授の多くは研究者としての学問的雰囲気欠けるきらいがあった。無責任な放談を好み、宴会好きで、芸者との痴話も多い。

若いころから遊び好きだった渡植が、ひとり聖人君子を決めこんでいたわけではなかった。渡植もお座敷通いを始める。善はそんな夫に袖で対の羽織と着物を仕立て、さらに東京の旦那衆の間で流行していた外套を取りよせ、最高級の身じたくで夫を送りだし、何時になっても起きて夫の帰りを待っていた。

紗江子は、「色ごとは、つかずはなれずがいい」と父がいったのを覚えている。渡植自身の戒めだったのであろう。遊び慣れていたかれは、人間的なふれあいを芸妓にも求め、一線をこえないように自らを律していたという。

渡植は、芸者衆によくもてた。

日中、街中で彼女たちと出あうと必ず自分の方から声をかけ、しばらく談笑する。芸妓に昼中、人目のあるなかで声をかけたりする者はめったにいないし、それも高商の教授だというので評判になった。渡植は職業や身分で人を差別し



安倍 能成

たり、処し方を変えるようなことは根っからしない人柄であった。

お座敷の主役はたいてい渡植だった。

芸妓にねだられると、大広間の正面の畳の上に正座し、「桜門五三桐」や「白浪五人男の日本駄右衛門」などを、高名な役者の声色をまねて演じる。だれもがほればれと聞き入りいつも拍手喝采だった。

そんな渡植にも惚れた芸妓がいた。名をお吉といい義太夫の太棹の名手だった。

渡植は宴会でひどく酔酩し、ふと目覚めるとお吉の膝枕で眠っていたことが何度かあった。白みはじめた外の気配を感じながら渡植は、彼女の膝に涙をこぼした。気持ちは通じあっているのに、どうしてもお吉を抱くことができなかったのである。こんな朝、かれは家に帰り、妻に隠れ、「お吉、お吉」と声をだして泣いた。

昭和十年三月、高商内の派閥争いのとぼっちりで会寧の商業学校へ赴任したばかりの渡植は、校長室においていた電文の下書きを妻にみられてしまう。

「コヨイ、イトノネ、トオクシノブ」

善はなんと甘っちょろい電文かと、夫をなじるまでもなく、すっかり軽蔑してしまったという。

ところで昭和十二年八月、本多謙三の病状が悪化したという報^{しら}せが会寧にとどいた。渡植はすぐに帰国し、東京市郊外の吉祥寺に友を見舞った。

本多はここ十年来、宿痾の病と闘いながら教壇に立ち、「思想」「改造」「中央公論」などに次々と論文や評論を発表していた。満州事変以降の国内景気の回復とともに、言論・思想界が急速に国家主義へかたむくなかで、本多の研究姿勢や学問は決して時代の流れ

に与^{くみ}することはなかった。

本多は昭和十年、法政大学にいた戸坂潤に誘われ「唯物論研究会」のメンバーとなり、文芸や科学をはじめあらゆる社会事象に対して、唯物論の立場から批判する視座を確立していく。ファシズムの批判の本拠となった唯研の創立時の若き論客として、本多にたいする期待は大きかったのである。が、ほどなく、病魔がまた本多を襲ったのだ。

二人が会うのは、三年ぶりのことだった。渡植は昭和九年八月、病氣療養のため神戸に帰郷していた本多を訪ねたことがある。



ひとしきり話しを交わし、まだ話たらないからと、一つの蚊帳かやのなかに床を二つ並べた。やがて話し疲れた本多の寝息を聞きながら眠りにおちた渡植は、異変に気づいて目が醒めた。布団から上体を起こした本多が背を丸めて、うめき声を発していたのである。背をさすり、ぐっと抱きおこそうとしたそのとき、本多は大量の喀血におそわれ、渡植は病人のなま温かな血しぶきを浴びながら、かれの身体を必死に支えているのだった。



病勢がその三年前よりも、さらに進んでいることは明らかだった。

縁側の藤椅子に身体を沈め、本多は庭園をながめながら、遠来の見舞客に左右田博士と最後にあったときのことをぼつりぼつりと話した。博士が亡くなる二月前の六月、用談もあって自宅に伺うと、寝室で休んでいた博士は体調が悪く呼吸も少し苦しそうであったが、二十年来探していたサロモン・マイモンの本がこのころやっと見つかってとても愉快だといい、晴れ晴れとした笑顔をつくられたのだという。

左右田先生が逝いかれて十年になるので、大学の新聞に求められ、そんなとりとめのない思い出をつづったが、それにつけても博士が案じていた以上に日本はヘンな道へ進んでいく。西洋の物質文化の物真似をとおして産業や科学技術の近代化を急いだあまり、日本の文化はやせほそり、かわって分不相応な大国意識や驕慢が、国民をとんでもない方向へおしやっていくようで心配でならないと本多は憂えるのだった。

病のためにこの三月、東京商科大学を退官した本多だが、執筆も唯研の活動もつづけていた。哲学者として、もっと社会とかかわり発言していくことが自分の使命だ、と本多は病の床にあってなお強い語調で持論をくりかえすのである。

渡植はこの日、すっかり頬のおちた本多の相貌のなかで、異様な光を放っていた眼がかれの脳裏に焼付き、生涯忘れられないものになっていった。

本多謙三は十月鎌倉の療養所へ移り、翌年の三月七日永眠した。